

紀要

■設立40周年記念号

【小特集】東近江市相谷熊原遺跡をめぐって—縄文時代草創期の遺構と遺物

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 「矢柄研磨器」雑考 —相谷熊原遺跡を理解するために— | 松室 孝樹(1) |
| 鈴鹿山中の遺跡にみる選地の原理 —相谷熊原遺跡の理解に向けて— | 重田 勉(9) |
| 土偶の機能・用途に関する理解の移ろい | 瀬口 真司(15) |

*

*

*

高島市今津町弘川B遺跡出土の縄文土器 (2) 小島 孝修(28)

草津市志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群の様相 小竹森直子(42)

近江・湖東北部の埴輪 辻川 哲朗(48)

製鉄炉の設置方法について —源内峠遺跡1号製鉄炉の検討— 大道 和人(73)

古代建築物構造ノート —掘立柱の再考— 横田 洋三(81)

塩津起請文札と勧請された神仏 濱 修(86)

三重県桑名市西方廃寺出土の飛雲文軒瓦について
—桑名市博物館所蔵品より— 中西 常雄(92)

観音正寺と觀音寺城跡 (2) 伊庭 功(95)

遺跡出土の化粧道具に関する覚書 —夏見城遺跡出土の毛抜きから— 堀 真人(103)

将棋史研究ノート (5) 金将の役割 —金将の動きと配置から— 三宅 弘(116)

「忍者」研究の現状と課題 阿刀 弘史(120)

文化遺産としての琵琶湖

—「水」を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群— 大沼 芳幸(124)

平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習を終えて…具志堅有紀(142)

保存処理30年の記録 中川 正人(148)

24

紀要

第 24 号

—設立40周年記念号—

2011. 3

財団
法人滋賀県文化財保護協会

平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習を終えて

具志堅 有 紀

1. はじめに

滋賀県埋蔵文化財センターでは、平成20年度から幼児・小学生を含む一般の方々を対象とした考古学体験学習を開催している（表1）。平成20年度の夏休み考古学体験学習では「水」をテーマに、秋は「火・水・木の考古学」をテーマに考古学体験学習を開催した。平成21年度の夏は「水」、秋は「実りの秋：ドングリ」をテーマに行った。

そして、平成22年の夏休み考古学体験学習は、夏休みの自由研究に活用してもらおうと「昔の人のモノ作り」をテーマにし、①「鹿の角で釣り針をつくろう！」、②「石鉄を作ろう！～縄文の弓矢で狩人になろう！」、③「鍛冶体験」、④「草木染めに挑戦！」の四つの体験学習を実施した。

一方、秋は「実りの秋」をテーマに、①「縄文食を食べよう！」、②「草木染めに挑戦！」、③「鍛冶体験」、④「古代のスイーツを食べよう！」の四つの考古学体験学習を実施した。

今回は、平成22年度の夏休み・秋に開催した考古学体験学習の詳細と、その成果について報告する。

2. 「夏休みの考古学体験学習」の実施内容と結果

（1）概 要

平成22年7月28日（水）～8月27日（金）のうち、四種類の体験学習を全16日間開催した。その結果、体験学習参加者合計は482名であった。各体験は、午前・午後の2回で定員20名（①鹿の角で釣り針作りのみ小学五年生以上、午後1回定員10名）実施し、所要時間が2時間、参加費は1名につき500円と設定した（写真1～9）。

（2）各メニューの実施内容

①「鹿の角で釣り針をつくろう！」

実施内容 7月28日（水）・8月25日（水）に実施した結果、23名が参加し、後日の外来魚釣りでは9名が参加した。

大まかな形に成形した鹿角を、水で濡らしながら棒ヤスリで形を整え、磨き上げて作る。完成した釣り針は、防水のために灰汁で加熱する。アルカリ処理を行った。体験終了後、希望者とともに釣り用の餌であるミミズを当センター周辺で採取した。後日、手作りの竿などを持参した参加者らと、浜大津にて外来魚を対象とした釣りを行った。

安全対策 参加者が棒ヤスリやデザインカッターなどの道具を使用して、鹿角を削る作業を行う際は、子供用軍手を

表1

事業名	開催日程	平成20年8月4日（月）～8月10日（日）【開催期間7日間】、平成20年11月1（土）～3日（月・祝）【開催期間3日間】			
		プログラム名	参加費	内容	参加者
H20夏休み 考古学体験学習	①水時計（漏刻）作り	無料	ペットボトルで漏刻（水時計）を作る。	49	358
	②竹の水鉄砲作り	無料	竹製の水鉄砲を作り、的撃ちをする。	70	
	③火起こし	無料	舞切り器で火種を起こす。A・Bを行っていない時間帯に実施。	194	
	④拓本教室	無料	土器や瓦などを使って拓本を体験する。A・Bを行っていない時間帯に実施。	25	
	⑤石器作り	無料	高島市産の高島石を使って磨製石器を作る。A・Bを行っていない時間帯に実施。	20	
H20火・水・木の 考古学体験学習	①鍛冶体験	無料	熟した金属の棒（ベグ）を叩いてオリジナルナイフを作る。	21	44
	②水時計（漏刻）作り	無料	ペットボトルで漏刻（水時計）を作る。	15	
	③木こり体験（古代の製材体験）	無料	丸太を楔と木槌を用いて板材にする古代の方法と、県内の木挽き職人による大鋸を用いた板材作りの方法の見学と体験。	8	
事業名	開催日程	平成21年8月7日（金）～22日（土）【開催期間6日間】、10月24日（土）～11月1日（日）【開催3日間】			
	プログラム名	参加費	内容		参加者
H21夏休み 考古学体験学習	①でんぶん作り	500円	石皿や磨石を使って、ジャガイモのでんぶんを取りだし加熱して食べる。		11
	②人形代作り	500円	出土品を参考に、形代を作る。		9
	③染色体験	500円	木綿布で藍の生糞の叩き染めや、チガヤやソヨゴで染色。		60
H21実りの秋の 考古学体験学習	①ドングリを拾おう！	500円	センター周辺でドングリ採集		11
	②ドングリを食べよう！	500円	ドングリ利用の歴史、ドングリ食の試食と調理。		5
	③ドングリで染めよう！	500円	クヌギの殻斗を使って紺布を染色。		22
事業名	開催日程	平成22年7月28日（水）～8月27日（金）【開催期間16日間】、10月16日（土）～11月13日（土）【開催6日間】			
	プログラム名	参加費	内容		参加者
H22夏休み 考古学体験学習	①釣り針を作ろう！	500円	鹿の角を削って釣り針を製作する。		23
	後日イベント：外来魚釣り	無料	手作りの釣り針を使って琵琶湖で外来魚釣り。		9
	②石鐵を作ろう！	500円	サヌカイトで石鐵を作り、手作りの弓矢に装着し、狩猟体験。		127
	③鍛冶体験	500円	熟した五寸釘を叩いて成形したオリジナルナイフ作り。		159
	④草木染めに挑戦！	500円	紺布を藍の生糞染め・エンジュで染色。		164
H22実りの秋の 考古学体験学習	①縄文食を食べよう！	500円	縄文時代の食生活の学習とドングリ食の調理・試食体験。		9
	②草木染めに挑戦！	500円	紺布をアカネ・カリヤスで染色。		33
	③鍛冶体験	500円	熟した五寸釘を叩いて成形したオリジナルナイフ作り。		24
	④古代のスイーツを食べよう！	500円	唐菓子の調理体験と試食。		33

用意し、怪我の防止に努めた。

感想と課題 鹿角についてや、黒曜石のナイフで角を切断する体験などを交えながら釣り針に成形する過程を説明したため、参加者らは昔の人がどのように道具を作ったのか、体験は何をするのか理解できたように見られた。解説を簡潔にし、製作工程の流れを理解させることが重要に思えた。

また、釣り針や餌とり、竿作りまで、なるべく自分達で行うという内容であった為、子供達の自主性を引き出すことができたように感じた。

課題としては、釣り針の材料のある鹿の角の確保である。鹿の角はなかなか入手しにくいので、入手ルートの確保が重要である。

②「石鎚を作ろう！～縄文の弓矢で狩人になろう！」

実施内容 7月30日（金）・8月6日（金）・12日（木）13日（金）に実施した結果、127名が参加した。

サヌカイトの薄片を、膝の上に乗せてクギを使って形を整え、打製の石鎚作りを行った。また、県内の高島市で産出する頁岩の高島石を使用しての磨製石鎚作りも行った。一方、弓矢作りでは、竹の矢の切れ込みに石鎚を挟んでたこヒモで装着し、木の枝にたこヒモを巻き付けて弓を作った。また、石鎚破損防止のために、弓矢のみの的うちの練習を各自行った後、石鎚を装着した弓矢体験をおこなった。

参加者が打製石器を作るのが難しい場合は、保護者に手伝ってもらうか、磨製石器作りのみの体験をしてもらった。

安全対策 石鎚を作る際は、ブルーシートを足下に敷き、飛び散った薄片が改修しやすいようにした。また、怪我防止の為にゴーグルと革手袋を装着し、服の破損や怪我の防止のために膝の上に人工皮を乗せて、その上で石器作りを行った。また、弓矢作りでは、材料を事前に工具で成形し、参加者にたこヒモを結ばせるだけで弓矢が完成するように事前準備を行った。

矢を放つ際は、職員の号令を合図に、2～3人ずつ矢を放った。そして、職員が矢を回収した後、また矢を放つというように行い、怪我防止に努めた。

感想と課題 サヌカイトの薄片を短時間で成形する子、堅いために手こする子、夢中になる子が多く見られ、基本的には楽しんで作っているように見えた。石器の材料となる薄片選びの際に大きな薄片を選んでしまい、薄片を成形することができない子がいれば、再び自分で薄片を選ぶように促した。また失敗しても、より作りやすい薄片を選び、完成させることができた。このように失敗しながらも、最後には石鎚を完成させるというプロセスが味わえるプログラムになったと感じた。一方で、子どもの石鎚作りを手伝う内に、保護者の方が製作に夢中になるという姿も見られた。

弓矢体験では、ほとんどの子どもが弓矢に触れた経験が無かったが、練習をするうちにコツをつかむ子や、夢中に

なって矢を飛ばす子など、ほとんどの子どもが自分で作った弓矢を使って的を射ることを楽しんでいた。

参加者の約半数、特に高学年の子供達が自由研究にしたいと石鎚作りに取り組んでいた。多くの質問をする子供や、夏休みの自由研究のために見本用のサヌカイトをもらいたい、と申し出る子供が数名見られた。子供の興味を惹くメニューだったようなので、次年度も固定メニューとして継続させたい。

課題としては、石器を作る際の道具についてである。子ども用の革手袋は販売していなかったため、全て女性用のMサイズを用意した。しかし、小学校低学年以下だと、手が小さいため手袋が合わず、作業がしにくいくことがわかつた。そのため、参加者は小学校中～高学年以上にするなど年齢制限を設ける必要があると感じた。また、石材を割るための五寸釘は細いため、何度も地面に落とす子どもが見受けられた。一方、試しに使用してもらった鹿の角先は、持ちやすいとの意見が多数あったので、次年度も石器作りを行う際は、鹿の角先を人数分用意したい。

③「鍛冶体験～オリジナルナイフを作ろう！」

実施内容 8月2日（月）・11日（水）・17日（火）・18日（水）に実施した結果、159名が参加した。

県内の製鉄遺跡、鍛冶の説明の後、炭を燃やしているU字溝に五寸釘を入れて加熱し、職員が順番に熱した釘を抜き出し、参加者にハンマーで叩き延ばさせてナイフの形に調えた。釘を水につけて冷やした後、コンクリートブロックと砥石で研磨し、紙製の鞘を作り、持ち帰るという流れで行った。

安全対策 火の粉や熱せられた鉄片が、参加者の目に入るのを防止するためにゴーグルを装着し、怪我防止のために子供用軍手をはめてハンマーで釘を叩く作業を行った。炉の側には、水を入れたバケツを数個用意し、万が一の事故に備えた。

その他は、参加者らを火に近づきすぎないこと、釘を人に向けないこと、作品完成後の取り扱い後に気をつけることなどを注意した。

感想と課題 鍛冶体験は、平成20年度の秋にも実施したメニューである。そのため、実施にあたってのノウハウはあったものの、火を使う体験メニューのため、負傷や火災などを起こさないことといった安全面の確保が課題であったが、炉の管理や安全注意の徹底等を行った結果、負傷者や事故なく終わることができた。参加者からは、「火を使う体験は家庭ではできないので、貴重な体験になった。」「釘という身近な材料を使って刃物ができたことに驚いた」「思い通りに行かない所もあったけれど、自分でナイフを作ることができて楽しかった」などの感想が寄せられた。

課題としては、服装と暑さ対策が挙げられる。体験初日は、安全な服装・暑さ対策の連絡が十分に行き渡っていないかったため、半袖や半ズボン、スカートにサンダルなどの

軽装の参加者が多かった。そのため、怪我のリスクが高く危険に思えた。

今年は記録的な猛暑であったこともあったが、火を使う鍛冶体験は、参加者や職員共に体力の消耗が激しかった。しかし、他の施設ではなかなか行われない体験であり、作品を持ち帰ることができる為、夏休みの自由研究には最適ではある。次年度も夏に開催する場合は、給水サービスを行うなど暑さ対策や安全な服装で来ることの注意を十分に徹底したい。

④「草木染めに挑戦！」

実施内容 8月4日（水）・20日（金）・23日（月）・27（金）に実施した結果、164名が参加した。

草木染めは、平成20年度の夏・秋の体験学習でも実施したメニューである。今回は、夏の時期に染められる色ということで、エンジュ（〔槐〕マメ科：黄・深緑色）、藍の生葉染め（〔蓼藍〕タデ科：青色）の三色を染め物の歴史と染色作業手順の説明の後、染めたい色を選択し、各自2枚配布された長方形の大小のサイズの絹布を染色した。

エンジュは花の蕾を事前に煮出して染め液とした。まず、加熱している染め液に絹布を浸し煮た後、ぬるま湯に鉄媒染剤（古釘を酢で煮たもの）・アルミ媒染剤（椿を燃やした灰）を入れて媒染液を用意し、絹布を浸して発色させた。水洗後、天日に干して乾燥させた。

藍は、当センター敷地内で栽培している生葉を用いた。刻んだ藍の葉を水と酢とともに葉をこして染め液を作り、その中に水で濡らしておいた絹布を浸し、染色液から取りだし広げて空気にさらす作業を繰り返した後、天日に干して乾燥させた。

安全対策 カセットガスコンロ、IH調理器を併用して、鍋に入れたエンジュの染色液を加熱した。鍋の中をかき混ぜる役は、事故防止のために職員が行った。また、媒染剤はお湯を使用するため、鍋や媒染剤を入れた容器に手を触れないよう注意した。藍の葉を包丁で刻む作業は、主に職員が行った。

感想と課題 媒染剤によって変わる色の変化、藍の生葉を揉んで自分の爪まで青くなってしまったこと、白い絹布が草木によって色づく不思議に触れることで、子ども達の目は驚きや感動に満ちていた。また、草木染めは保護者の方が質問をし、メモをとるなどの熱心な姿が見られた。

参加者らの感想は、「小さな子供でも簡単にできる体験のがよかった」、「障害をもった子供でも気軽に参加できたのがよかった」などの感想が寄せられた。課題としては、布に絞りを施すか否かである。前年度はたこ糸などで絞りを施したが、10~20分と参加者によって作業時間の差が生じたため、絞りは無しで行った。しかし、一部の保護者・参加者からは「絞りがなければデザイン性に乏しく作品に面白みが無くなるので参加しない」、「ただ染めるだけでは子どもの独創性・個性を活かせない」、などの意見や感想が

寄せられた。次年度に絞りを施すならば、輪ゴムを用いた絞りを施す簡易な方法をとるのも良いだろうと感じた。

3. 「実りの秋の考古学体験学習」の実施内容と結果

（1）概要

平成22年10月16日（土）～11月13日（土）のうち、土曜日・祝日の6日間で、四種類のメニューを実施した。その結果、99名の参加があった。各体験は、定員が①と④が各回10名・②と③が各回20名、各回午前・午後の2回実施し、所要時間が2時間、参加費は1名につき500円と設定した（写真10～16）。

（2）各メニューの実施内容

①「縄文食を食べよう！」

実施内容 10月31日（土）に実施した結果、9名が参加した。ドングリがどんな味なのか、縄文時代の人々がどのようにドングリを調理していたのか知ることを目的に行った。

調理の前に、参加者に理解を深めてもらうため、当センター内の考古資料の展示解説を行った。

今回のドングリ料理は、前年度にも体験学習で調理したものと同じメニューで、県内や県外の縄文時代の遺跡から出土した食料残滓を参考に、センター職員らが考案した。スープの材料は、ドングリ（マテバシイ）、鶏肉、アワ・キビ・ソバなどの雑穀、キノコなどである。当日は、スープを鍋で煮ている間に、ドングリのクッキーやハンバーグも作り、スープとともに試食した。

調理時間短縮のために、使用するドングリは職員が事前に殻を割り、下茹でしたものをあらかじめ用意したが、参加者にも実際に石皿と磨石を使用して、数個のドングリの殻割り体験をしてもらった。また、職員が作成したサヌカイト製のナイフで、鶏肉やキノコを切る体験も行った。

調理・試食終了後には、当センターが周辺でドングリの採集を行った。

安全対策 サヌカイト製のナイフの刃先が折れて、薄片が食材に入り込まぬように使い方の指導と食材に薄片が混入していないか職員がチェックを行った。また、料理を煮たり、焼いたりなど火を扱う作業は職員が行った。

感想と課題 石器を使った調理体験は、参加者らに堅いドングリの殻が石器で簡単に割れることや、石器で食材を切ることができることなど、縄文時代の人々の知恵や工夫を実感してもらうことができ、好評であった。

参加者らの感想は、「ドングリが食べられることを始めて知った」、「ドングリの種類を色々知ることができた」「健康に良さそう」、「意外とおいしかった」、「石の道具を使うのが楽しかった」、「昔の人々の生活を少し覗いて見ることができ、興味深く楽しかった」という好意的な感想が多かった。一方で、「古代の火起こし器で火を自分で起こし、土器で調理した方がより昔の人の暮らしを体験できた」とい

う感想もあった。

今後の課題としては、参加者の感想にもあったように、調理に使用できる復元縄文土器を用意し、参加者らが火を起こして土器で煮炊きする工程を加えられるよう改善することである。

②「草木染めに挑戦！」

実施内容 10月23日（土）・30日（土）に実施した結果、33名が参加した。秋の染色では、伝統的な染色材料であるアカネ（〔茜草〕アカネ科：茜色）とカリヤス（〔刈安〕イネ科：黄色・深緑色）の二種類を行った。これらは、正倉院宝物に染色例があるように、古くから草木染めに利用されてきた植物である。特にカリヤスは、伊吹山産のものが「近江刈安」として有名である。

染め物の歴史と染色作業手順の説明の後、染めたい色を選択し、各自2枚配布された長方形の大小のサイズの絹布を染色した。

アカネは、根の部分を煮出し、事前に染め液を用意した。まず、椿灰の媒染液で先媒染し、染め液で煮染めした。その後、水洗し、また媒染し、水洗後、天日に干した。

カリヤスは、茎・葉・花穂を煮出し染め液を事前に用意した。まず、絹布を染め液で煮染めした後、鉄媒染液・アルミ媒染液に絹布を浸して発色させた。水洗後、天日に干して乾燥させた。

安全対策 カセットガスコンロ、IH調理器を併用して、鍋に入れた媒染液や染め液を加熱した。鍋の中をかき混ぜる役は、事故防止のために職員が行った。また、媒染剤はお湯を使用するため、鍋や媒染剤を入れた容器に手を触れないよう注意した。

感想と課題 伝統的な染色材料であるアカネとカリヤスが染め出した鮮やかな色彩は、参加者には非常に好評であった。「植物でも綺麗に染めることができて驚いた」、「魔法の水（媒染液）に布を浸して色が変わるのが面白かった」、「綺麗に染められた」といった感想が多くあった。その他、「ハンカチやバンダナなど、日常で使いやすいモノでも染めたい」、「絹よりも木綿など手入れが簡単な素材が良い」などの素材に関する感想もあった。また、夏と同じく「絞り染めがしたかった」という感想もあった。これらの参加者の感想から読み取れる課題は、染色する生地と絞りを工程に取り入れるかの2点であった。

③「鍛冶体験～オリジナルナイフを作ろう！」

実施内容 11月3日（水・祝）に実施した結果、24名が参加した。体験内容は、夏と同じである。

安全対策 夏と同じである。

感想と課題 涼しい気温だったため、夏に実施したよりも快適に体験学習を行えた。夏では暑さ・服装対策が課題であったが、全ての参加者に電話連絡で、飲み物の用意と安全な服装の注意を徹底したので、課題は克服できた。

④「古代のスイーツを食べよう！」

実施内容 11月6日（土）・13日（土）に実施した結果、9名が参加した。菓子の歴史の紹介と古代のお菓子「唐菓子」の一つである「ブト」作りと試食を行った。ブトに包む餡と味付け用に、石臼で、きな粉を挽いた。生地をこねて成形し、茹でた後で餡を包み、さらに揚げて調理が完成了。その間、クロモジ製の爪楊枝を作るなどして、待ち時間の調整を行った。完成したブトを葉に盛りつけ、職員が事前に用意した蘇とビワ茶も試食した。

安全対策 火を使う工程は、参加者の怪我防止のために職員が行った。

感想と課題 参加者からは「石臼は重かったけれど、大豆を挽く作業はとても楽しかった」、「昔のお菓子の作り方を学べて、それを食べることができたのが良かった」、などの感想をいただいた。普段食べているきな粉を昔の道具で作ったことや、現代とは違うお菓子の作り方で調理し、味わうことができたことが親子共々興味深かったようだ。

課題としては、二つある。一つ目は、調理時間の待ち時間の対応である。茹でたり、揚げたりする工程での待ち時間の際、我慢できずにウロウロする子どもが数名見られた。この待ち時間の際にできる作業や、唐菓子について説明するなどの対応が必要のように思えた。二つ目は、調理できる唐菓子のメニューを増やして、プログラムの内容をさらに充実させることである。

4. 広報について

夏休みの考古学体験学習では、センター周辺でのチラシの配布やポスターの掲示、HPや県内全ての小学校の児童を対象に配布される体験学習紹介パンフへの情報掲載などの広報活動を行った結果、482名の参加を得ることができた。前年度の参加者が80名であったことと比較すると約6倍の参加率の増加である。また、アンケート集計の結果では、センターへの来館が初めてなのは全体の50%、二回目は26%、三回目以上は24%であった。このことから新規の来館者の参加が高いことがわかる。アンケート結果から、前年度の課題であった広報不足はこれによって解決できたように思われた。

その一方、記録的な猛暑による熱中症・脱水症対策が重大な課題となった。夏期の体験学習では、どのプログラムでも、冷水サービスを行い、こまめに休憩時間を設けるなど、参加者の安全面に配慮する工夫が必要だと感じた。

実りの秋の考古学体験学習では、99名の参加者を得ることが出来た。前年度の参加者が38名であったことと比較すると約3倍の参加率の増加である。アンケートの集計結果では、センターの初めての来館が全体の13%、二回目が30%、三回目以上が52%となっており、夏休み中にも広報を行ったことが、リピーターを獲得できたとに繋がったと考えられる。

以上の様に、平成22年度の夏と秋の考古学体験学習では、広報活動に力を入れることによって、前年度よりも多い参加者を動員することができ、新規・リピーターを獲得することができた。今後、積極的な広報で体験学習の認知度を上げるとともに、各プログラムの材料・道具・安全面などの問題点を改善し、より充実した内容の体験学習を目指すことが重要である。

5. おわりに

考古学体験学習では、古代人の生活体験やモノ作り体験を通して、「歴史」や「文化財」について知ってもらい、より身近なものとして親しんでもらうことを目的としている。体験を通して、昔の人達が作ったモノに込められた製作者の想いや技術、知恵・工夫などを学ぶことで、歴史や文化財への興味・関心を高めることにつながる。各体験参加者の感想には、「石の道具を使って、鹿の角や石を削ったりするのは大変だと思った」、「意外と難しかった」、「昔の人は器用だった」、「草木で綺麗な色に染まるのは驚きだ」、「ドングリが食べられることを初めて知った」、「昔のお菓子は美味しかった」など多様であった。このことから、自ら体験することによって、学び・気づき・発見していくという体験学習の効果がみてとれた。

一方、課題としては、「体験時間内もしくは後日、気軽に体験者が職員に疑問・質問などをできるようにする」ことである。各体験学習中は、二時間という短い時間で全ての工程を終えなければならない。せっかく、参加者が疑問を抱いたり、知りたいと思うことがあっても、時間が足りなくて質問できなかったり、職員に話しかけるのが気後れしたりして訊けずじまいになってしまう。このことを防ぐために、体験時間に余裕を持たせるように工夫し、職員が

積極的に参加者に話しかけ、職員と参加者が気軽に話せる雰囲気作りが必要ではないだろうか。また、疑問に思ったことを、すぐに答えを教えず、図書館や博物館で調べてみることを進めてみるなど、より文化財に親しんでもらうように進めてみるのも良いのではないだろうか。

以上のように、当センターの考古学体験学習では、歴史や文化財について、学校では学べないことを初めて知り、体験することで得られる驚きや発見が得られる。このような、普段の生活では経験できないことを体験することで、考古学や文化財に対する見方や興味・関心などがひきだせる学習効果がある。このような点をPRして、考古学体験学習の広報を行えば、より多くの方に「参加したい」と感じてもらえるであろう。

今後、当センターで行う体験学習は、文化財についてより深く知ってもらい、出土品などを参考に、作品を自分で作り、自分で使ってみるような内容にしていきたい。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 伊藤ふくお・北川尚史（2007）『どんぐりの図鑑－フィールド版』
トンボ出版
鈴木公雄（1988）『古代史復元2 縄文人の生活と文化』講談社
具志堅有紀（2010）「実りの秋の考古学体験学習を終えて－平成21年度滋賀県埋蔵文化財センター体験学習より－」『紀要』23、財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1997）『栗津湖底遺跡第3貝塚』
徳永桂子（2004）『日本どんぐり大図鑑』偕成社
山崎青樹（2001）『古代染色二千年の謎とその秘訣』美術出版社

（ぐしけん ゆき：調査普及課 嘴託）



1：釣り針作りの様子。
2：釣り針未製品と完成品
3：作品を使っての魚釣りの様子
4：釣り上げた魚（ブルーギル）
5：石鎌作りの様子
6：完成した弓矢での打ち
7：鍛冶体験の様子
8：完成したオリジナルナイフ
9：藍の生葉染めの様子
10：カリヤスの染色（媒染）の様子
11：染めた布を干す様子
12：ドングリの殻を磨石と石皿で割る様子
13：縄文食試食の様子
14：古代のスイーツ作りで、きな粉びきの様子
15：唐菓子を揚げる様子
16：完成した唐菓子の様子

写真1 平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習関連写真

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていきたい。

他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南市夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市觀音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなっていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるよう伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いするだいである。

編集担当（T-T）

紀 要 第24号 一設立40周年記念号一

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.24 2011.3